

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|------|---|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 甲 | 第 | 号 |
|------|---|---|---|---|

氏 名 石井 健太

論 文 題 目


Characteristics of primary and repeated recurrent retroperitoneal liposarcoma: outcomes after aggressive surgeries at a single institution

(原発および再発後腹膜脂肪肉腫の特徴：単施設における積極的手術療法の術後成績)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

今釜史郎 

名古屋大学教授

委員

安藤 雄一 

名古屋大学教授

委員

古森 公浩 

名古屋大学教授

指導教授

江畑 智希 

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、当院で診療された 52 例の後腹膜脂肪肉腫患者のデータを解析し、隣接臓器の合併切除を伴う積極的な外科治療後においても、局所再発を繰り返す頻度が高いことが確認され、再発を繰り返す中で腫瘍の悪性度が高まっていく可能性が示唆された。術後の局所再発率は高いが、初回手術および初回再発に対する切除では長期無再発生存例もみられ、初回手術時の R0 切除は無再発生存期間の延長と有意に関連していた。3 回目以降の手術では R0 切除が非常に困難で、非切除例と比較して生命予後を改善する効果も示されなかった。





本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 脂肪肉腫において高分化型と脱分化型は、その臨床、病理学的特徴が異なるため、高分化型のみ、あるいは脱分化型のみを解析している研究も散見される。今回は主にサンプルサイズの問題で、両者を同一疾患として主解析が行われた。副解析として行った脱分化型に限った生存時間分析では、隣接臓器合併切除が無再発生存期間延長と有意に関連していた。また初回手術時高分化型と診断された 22 例中 6 例が、治療経過中に脱分化型へ変化した。このような知見が得られたという点においても、今回高分化型と脱分化型の両者を解析した意義があったものと考えられる。
2. 本疾患の特に高分化型においては、術後長期間を経過したのちも再発を来すことがあり、根治を定義することが困難である。そこで無再発生存期間を目的変数とした生存時間分析を行った。また再発に対する外科治療においては、再発率が高く、無再発生存期間が短い症例が多かったため、外科治療の意義を検証する目的で全生存期間を目的変数とした生存時間分析も行った。初回および 2 回目手術は全生存期間の延長と有意に関連していたが、3 回目以降の手術では有意な関連は見られなかった。
3. 局所再発に対する 3 回目以降の手術の意義はほとんど研究されておらず、本研究においてもその有益性は示されなかった。局所再発に対して外科治療のみが行われ、局所再発を繰り返した症例も散見されるため、放射線治療あるいは化学療法を補助的に行うことの意義は今後検証されるべきと考えられる。また本疾患は多くの診療科が関与する極めて専門性の高い疾患であり、専門施設に症例を集約化し、施設内でも multidisciplinary team で治療方針を議論する必要がある。加えて、そのような専門施設が複数参加する大規模臨床試験において、3 回目以降の手術療法および補助療法の意義は検証されるべきである。

本研究は、後腹膜脂肪肉腫の臨床、病理学的特徴を明らかとし、本疾患の治療における今後の課題を明確化する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|--|---|---|-----|-------|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 | 氏 名 | 石井 健太 |
| 試験担当者 | 主査 <u>金 史郎</u>  副査 ₁ <u>安藤 雄一</u>  副査 ₂ <u>ナ 木 公 浩</u>  指導教授 <u>江 畑 智 希</u>  | | | |
| <p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高分化型脂肪肉腫と脱分化型脂肪肉腫を層別化せず解析した点について 2. 無再発生存期間と全生存期間をアウトカムとした点について 3. 再発後腹膜脂肪肉腫の治療上の課題と今後の展望について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p> | | | | |